

強しても、妙法の広宣流布を忘れず、最後は身延のお祖師様に習うべきものと存じます。

本興師は身延で生れ、身延で得度し、身延の学校を出て身延山の先生になり、遂に学頭となつて新校舎の大成を喜び、間もなく自坊に帰つて遷化せられた。今こそ身延山生拔はなはだの先生が幾人か見えますが、当時としては本興師を嚆矢と致します。乃ち一詩を賦して本稿の終りと致します。

悼松木本興師 松木本興師を悼む

本興師逝不堪憂 本興師逝いて憂いに堪えず

校舎新成失学頭 校舎新に成て学頭を失ふ

三処道場君既過 三処の道場君既に過ぎぬ

祖山恭弔大高様 祖山に恭く弔す大高様

昭和四十三年五月十九日遷化日恭賦

(元祖山学院教頭)

松木先生を憶う

里 見 泰 穩

先生の略年譜を見ながら、その足跡を追憶していると、先生と身延山との深いつながりを思はざるを得ない。身延

山の鐘の音を聴きながら生声をあげ、身延の山や川を友として成長し、祖山学院に学び、東京へ遊学の後再び母校に帰り教壇に立って講義する傍ら、その爽かな弁舌を以って日本全国に法輪を転ずる。これが先生の生涯であったと言えよう。教壇に立たれてからでも、すでに半世紀、その教育の功労も偉大であると言はねばならない。

四十二年十二月十二日だったと思う。先生が入院されたと聞いて甲府の国立病院に御見舞に伺った。その時の奥さんの御話で、今精密検査をしているので、二三日のうちに結果がわかると聞いて、正直にそうだと思って、それ程重態だとは思はなかった。二十日には第二学期の試験も終るので学校の教職員が、揃って御見舞に伺うことになっていきますと告げて病院を辞去したが、これが先生と会った最後になった。二十日を待たず、十九日未明遷化されたのであった。

私が此の学校に奉職したのは、昭和十五年四月であったが、その頃は各先生が教師寮に一室づつを持っていて、二・三日泊って講義をし、自坊に帰って行くというようなことが行はれていた。食事も食堂に集って、みんなで話し合いつつながら楽しい夕食の一刻を過ぎたものだった。その頃の先輩の諸先生には、既に物故された方もあり、教壇を去られた方もあり、一世代は三十年というが、此の間、変らないように、学園も変ったものと思う。戦争中や戦後の学園の困難な様子も思い出されるが、そんな時代を通して終始、学園を離れなかった松木先生のことを、時にふれて、追憶して見るのである。